

# 變文資料再整理——「舜子變」

玄 幸 子

## Collation and Supplements to the Collection of the Tun-huang Pien-wen (敦煌變文) —A Critical Interpretation of Shun Tzu Pien (舜子變)

GEN Yukiko

The Tun-huang story of Shun as a boy is the most substantial text for a historical study of Chinese colloquial language. It has noticeable colloquial features for vocabulary, phonology, and grammar. There are only two manuscripts (S.4654 and P.2721v) written about the story of Shun from Tun-huang. The two manuscripts have a head title and an end title that identify the text as Shun-tzu pien i chuan (舜子變一卷) and Shun-tzu Chih-hsiao pien-wen i chuan (舜子至孝變文一卷).

This paper gives a critical interpretation of the story of Shun as a boy through a collation and supplements to the Collection of the Tun-huang Pien-wen (敦煌變文).

## 第1節 概説と史料詳細

### 1-1 はじめに

敦煌文献が発見されてからすでに1世紀を大きく上回り、さらに口語史研究の本格的取組の端緒となった敦煌俗文学の集大成である『敦煌變文集』の出版から57年を経た現在、変文資料を対象とした研究はほぼ完成を見たであろうか。

その後、潘重規編著『敦煌變文集新書』（1984）、項楚著『敦煌變文集選注』（1990）、黄征・張涌泉『敦煌變文校注』（1997）と大きく分けて3種類の校注本が出版された中国と比べて日本では各論個別の研究はあるものの、変文資料をまとめた专著は管見のかぎり未だに見られないようである。いみじくも日本と中国の研究方針・取り組みの姿勢の差を端的に表わしているともいえよう。が、中国口語資料の基本書でもあり、俗文学研究においても基本資料といえる本書の訳注は日本においても当然出版公開されるべき対象であると思われる。以前より『敦煌變文集訳注』の出版を希求しつつ、実現に向けて積極的に始動できない状況のまま数十年も無為に過ごしてきた反省とともに、今回新たにこの目標に向けて一歩踏み出そうとするものである。

「舜の物語」に関しては、すでに多くの考察と研究がみられる。その祖型は『史記』「五帝本紀」やその注釈の中にも見いだすことができ、また、『孝子伝』にもそのバリエーションを見ることができる。さらにボストン美術館所蔵石室の壁面に舜が井戸に埋められ東隣の家の井戸から助け出されるモチーフが描かれていることなどから、北魏時代（386-534）以前に物語が人口に膾炙していたことも知りうるのである。

変文資料の中で「舜子変」は最も早期に注目されたものの一つであり、「本邦においては、その原典を見るべき機会は與えられていない」（p. 167）としながら、①狩野君山博士将来の原典の写しを倉石武四郎博士が再写したノート、②『敦煌綴鎖』（劉復編）所録全文覆刻、③『敦煌變文彙録』（周紹良刊行、1954年）の三本を照会校合して著述された早期の研究論著金岡照光「舜子至孝變文の諸問題」（大倉山學院紀要2、1956年）等がある。

さらにその特徴をいえば、変文資料中で最も口語性の強い資料の一つと言える。口語性の強さを測る基準は、口語語彙が多く用いられ、文法上でも口語の特徴が色濃く出現し、さらに別字が多く現れることである。以下いくつかの特徴について具体的に見てみよう。

### 1-2 資料の口語性

まず、口語語彙の多用についてみると、呼称に「阿嬢」「阿耶」「計（繼）阿嬢」「後阿嬢」「親阿嬢」などが用いられ、「安智（置）」「勾當」「立地」「卧地」「闻道」「将爲（謂）」などの動詞、

「大好」「當時」「當即」「即忙」「亦復」などの副詞、…と枚挙にいとまないほど多用されている。

文法特徴に関しては、修辭上の問題として、「共～無貳」、「爲復～爲復～」「助～寒温、助～同喜」「兼～也」の使用のほか、「些些」「試試」の重ね型、動詞の後置成分「～却」「～了」「～著」「～得」、各種補語も大きく認められる。また「使役文」や「把字文」なども早期の例として認めうる用例が見られる。後述の第2部では、口語語彙・成分を太字で示したので参照されたい。

さらに別字の存在は言語が音声であるということの証左であり、それが多く用いられることは、いうまでもなく口語性の高さを如実に示しているといえる。とりわけ池（持）孝、寡（掛）、計（繼）阿嬢、不豈（起）などの字義には全くかわりのない音通・同音字による表記は極端に言えば語音のみを借りたいわば表音文字としての漢字の活用法とも考えられる。

### 1-3 底本について

「舜子變」の底本は前後部にそれぞれ1種類のみであり、S4654【甲卷】とP2721v【乙卷】である。それぞれ全く違う手になり、字体、別字の出現状況などからも、完全に別個の写本であるといえる。S4654【甲卷】が稚拙な筆運びであり、同音音通による別字が多用されるのに対して、P2721v【乙卷】は筆運びもしっかりとしており、字体のバリエーションは多く見られるものの同音音通による別字の数はずっと少なくなる。それぞれの写本について別個に検討すべき点もあろう。

### 1-4 二写本共通の特徴

一方で上記の事象、底本の相違による異動とは相反する共通性も当然見られる。一例をあげると、「嬢」「娘」の使い分けである。「嬢」と「娘」は本来別の字である。基本義としては「嬢」は母親、「娘」は若い娘であるが、後世混同されるようになった。

いま、「舜子變」での使用状況を精査すると、「阿嬢」「計（繼）阿嬢」「後阿嬢」「親阿嬢」のように「嬢」字を使用するところはすべて母親の意味で用いられている。それに対して「娘」は呼びかけにせよ、地文にせよ、夫の瞽叟との関係の上でのみ使用される「娘子」の表記にのみ現れている。つまり、「舜子變」の書かれた、あるいは書き写された時には、「嬢」と「娘」の使い分けが歴然とあったということになる。

その他の具体的な例についての詳細は次で詳しく検討していく。

第2節 「舜子変」校録<sup>1)</sup>及び訳注

## 【甲巻 S4654】

## 舜子変一卷

堯(堯)王里(理)化之時, 日洛(落)千般祥瑞。舜有親阿孃在堂, 樂登夫人便是。樂登夫人染疾, 在床三年不<sub>[2]</sub>豈(起)。夫人喚言苦瘦(瞽叟):「立<sub>[3]</sub>有姑(孤)男枯<sub>[4]</sub>(孤)女, 流(留)<sub>[5]</sub>在兒<sub>[6]</sub>鞞<sub>[7]</sub>手頭<sub>[8]</sub>, 願夫莫令邊(鞭)耻<sub>[9]</sub>。」苦嗽(瞽叟)報言娘子:「[人]問(問)疾病惣<sub>[10]</sub>有<sub>[11]</sub>, 夫人大須攝治!」道了命終。舜子三年池(持)孝, 淡服<sub>[12]</sub>十(千)<sub>[13]</sub>日寡(掛)<sub>[14]</sub>躰<sub>[15]</sub>。

(翻訳)<sup>2)</sup>

## 舜子変一卷

堯王の治世にあつては、日々様々な瑞兆が降り注いでおりました。舜には実母がおられ、樂登夫人こそその方でもございました。(ところが)樂登夫人は病にかかり、三年病床にふせておられました。夫人が瞽叟を呼んで申しますには、「すぐにも母を亡くした一人はっちの子が、あなたの手に残されることになるでしょう、どうか折檻なさいませぬようにお願いいたします。」と。瞽叟が樂登夫人に答えて、「この世に病は誰にでもあるもの、おまえ、しっかりと摂生し病を治すように」といい終えるや、(夫人の)命は尽きてしまいました。舜は三年の間孝行をつくし、喪服を1000日の間その身に纏いました。

(校注)<sup>3)</sup>

〔1〕 洛、潘校では原巻が『浴』字に作るとしているが、原巻は「落」字に作る。音通により、「落」に改めるのは諸校本に同じ。

〔2〕 不豈、原巻は「不去豈」につくる。「去」字右傍に「卜」(削除符号)あり。

1) 本校の校録は玄2001を修正して再録している。録文中の( )は改めるべき字、[ ]は補うべき字であることを示す。

2) 本資料の翻訳は入矢義高先生の名訳がすでにあり、『仏教文学集』(中国古典文学大系60 平凡社 1975)に収録されている。が、今回新たな見解を示した個所もあり、訳語も現代風に改めた。

3) 校記で用いる略称は次の通りである。

原巻 S4654 (甲巻) および P2721v (乙巻)

集録 『敦煌變文集』(王重民等1957人民文学出版社) 録文

集校 『敦煌變文集』(王重民等1957人民文学出版社) 校記

潘校 『敦煌變文集新書』(潘重規編著1984) 校記

項校 『敦煌變文選注』(項楚著1990巴蜀書社、増訂本2006中華書局) 校記

校注録 『敦煌變文校注』(黄征・張涌泉1997中華書局) 録文

校注校 『敦煌變文校注』(黄征・張涌泉1997中華書局) 校記

- [3] 妾、原卷は「立」。諸校本は徐 1958の『立』當作『妾』に従って、「立（妾）」とする。ただし、この箇所は、「立ちどころに」と副詞の用法で読むべきであり、このままおく。
- [4] 枯、諸校本「姑」につくるが、原卷は「枯」。校訂は「孤」で、諸校本に同じ。
- [5] 流、集録校は「流（留）」。校注校はS5381の『康大嬢遺書』：「日落西山昏，孤男流一群。」を挙げ、「流」の義は「留」に同じであるため「可不校」とする。ただし、録文は「流（留）」で諸校本に同じ。
- [6] 児、諸校本は「兒」につくる。本資料では原卷はすべて「兒」。以後校記省略。
- [7] 聳、諸校本「壻」につくる。原卷は俗体の「聳」。
- [8] 手頭、集録校、潘校は「手頂（頭）」。項校不出校。校注校では“本篇頻繁以陽聲字與陰聲字互代，「頂」、「底」蓋同音假借，故予改校。”と述べ、「手頂（底）」と校訂する。原卷の字体は「頂」に似るが、もともと「頭」に作る可能性が大きい。
- [9] 集校では「疑『耻』當作『咎』，或作『叱』。」とする。蔣1997では「本篇的『鞭耻』似應解作折磨、擺佈等意思，不能呆死在鞭打上。究竟這兩個字應該怎樣寫纔算本字，現在也還不能確定。」(p. 554) 潘校は、「漢樂府『婦病行』：『屬累君兩三孤子，莫我兒飢且寒。有過慎莫笞。』『鞭笞』猶『笞笞』，『耻』作『笞』爲長。」校注校では、以上を踏まえて、「耻」字は押韻の関係から「笞」に校訂できないとし王梵志詩(P3211)の「寧可出頭坐，誰肯被鞭耻。」の句を挙げ「耻」が仄聲で韻にかなっていると説明する。更に、『唐律疏議』卷一「笞刑五」疏云：「笞者擊也，又訓爲耻。言人有小愆，法須懲誡，故加捶撻以耻之。」故「笞」、「耻」義近。又「耻」或爲「楚」之借音字，止攝字與遇攝字相通假。」とするが、むしろ『唐律疏議』の引用「捶撻するを加え以て之を耻ずかしめる」から「耻」の字義が認められるので校さずそのままおく。
- [10] 惣、變文の写本は、一般的にこの字体を用いる。
- [11] 項校ではこの句は意味が通らないとし、又この前後六言句のリズムが主となっているため、この句も六字でつくるべきだとの観点から、『人間疾病總有』と校訂すべきだとする。傍証として『八相變』：『生者只是一人，人間總有？』を挙げる。校注校では「問」字が衍字である可能性についても言及がある。項校に従う。
- [12] 服、集録は「眼」につくる。又、項校では、「眼」は「服」の字形の誤りであるとする。潘校では、原卷が、「服」に作るとする。ここは、潘校のとおり原卷が「服」に作る。
- [13] 千、原卷は「十」につくる。集録は「十」のまま録す、蔣 1997に拠って「十（千）」

と校訂する。

〔14〕 寡、原卷は減画草書体につくる。

〔15〕 躰、原卷は左記の俗体字。諸校本は正体「體」につくる。

苦嗽（瞽叟）喚言舜子：「我舜子小（少）失却阿<sup>〔1〕</sup>嬢，家里<sup>〔2〕</sup>無人主領。阿耶取一个<sup>〔3〕</sup>計（繼）阿嬢来，我子心里阿（何）<sup>〔4〕</sup>似？」舜子抄手啓阿耶：「阿耶若取得計（繼）阿嬢来<sup>〔5〕</sup>，也共親阿嬢無貳<sup>〔6〕</sup>！」

苦嗽（瞽叟）取得計（繼）阿嬢，不經旬日中間<sup>〔7〕</sup>，苦嗽（瞽叟）喚言舜子：「寮（遼）<sup>〔8〕</sup>陽城兵馬下，今年大好經記（紀）。阿耶暫到遼楊（陽），沿路覓些些<sup>〔9〕</sup>宜利。遣我子勾當家事。」  
（翻訳）

瞽叟が舜を呼び、「おまえは幼くして母さんを亡くし、うちには家事をきりもりする者がない。お前のためにおっかさんを貰ってやるのはどうだ？」とといいますと、舜は拱手の礼をしてお父様に申し上げます。「お父様がおっかさんを貰われるなら、本当のおっかさんと同じです。」

瞽叟は（舜に）継母を迎えると、10日も経たないうちに舜を呼び、「遼陽で戦が起こって、今年とはびきりいい景気だ。父さんはしばらく遼陽へ行き、道中少しばかり稼いでこよう。お前に家の事は任せたぞ。」とといいます。

（校注）

〔1〕 阿、原卷「即」字に作り、上に「阿」字を重ね書きして訂正。諸校本不出校。

〔2〕 里、諸校本全て「裏」につくる。原卷は「里」。

〔3〕 个、原卷すべて「个」につくる。諸校本すべて「個」に作る。以下同じ。

〔4〕 何、原卷「阿」に誤る。「何」に校訂する。「何似（いかん）」は口語の疑問詞。

〔5〕 来、原卷「來」に作る。諸校本「來」につくる。

〔6〕 貳、集校、潘校、項校は「二」に作る。校注校は「貳」に作る。原卷は「貳」。

〔7〕 間、諸校本「間」に作る。この資料では「門がまえ」は草書体で記される場合が多い。

〔8〕 寮、集録、潘校、項校みな作「遼」に作る。校注校の〈按：原卷作「寮」。下文「阿耶暫到遼楊，沿路覓些宜利」之「楊」集録改作「陽」，而「昨從寮陽城来，今得阿耶書信」之「陽」反而改作「楊」，今并據原卷録正。〉とあるのが正しい。

〔9〕 些些、原卷二字め踊り字。

去時只道壹年，參<sup>〔1〕</sup>載不歸<sup>〔2〕</sup>宅李（裏）。兎逆<sup>〔3〕</sup>阿耶長段（腸斷），步琴悉（膝）<sup>〔4〕</sup>上安智（置）。舜子府（撫）琴忠（中）間，門前有一老人立地。舜子即忙出門：「老人〔萬〕福尊躰！老

人從何方而<sub>[5]</sub>來？」老[人]保(報)郎君：「昨從寮楊(遼陽)城來，今得阿耶書信。」舜子走入宅門，跪拜阿嬢四拜。後阿嬢見舜子跪拜四拜，五讀(毒)嗔心便豈(起)：「又不是時朝節日，又不是遠來由(有)喜。政(正)午間跪拜四拜，學得甚媿(鬼)禍述靡(術魅)！」舜子叉手啓阿嬢：「阿耶暫到寮楊(遼陽)，遣舜子勾當家事。去時即來<sub>[6]</sub>一年，三載不歸宅里(裏)。兒逆阿耶腸段(斷)，步琴悉(膝)上安智(置)。舜子<sub>[7]</sub>府(撫)琴忠(中)間，門前有个老人，昨從寮楊(遼陽)城來，今得阿耶書信。兩拜助阿嬢寒温，兩拜助阿嬢同喜。」

(翻訳)

行くときにはたった1年といっておりましたが、3年たつも家に戻りません。舜は父を心配して断腸の思い、歩琴を膝の上に置いて奏でておりますと、家の前に一人の老人が立ちました。舜は急ぎ出て、「ご老人ごきげんよう、どちらからお出ででしょうか？」と尋ねます。老人が坊ちやま(舜)に答えて申すよう、「昨日遼陽から参りました。ここにお父様のお手紙をお持ちしました。」舜は中へ駆けこむと、母様に4度跪拜いたします。継母は舜が4度跪拝するのを見ると、激しい怒りがたちまち起こり、「節句でもなければ、遠方より慶事が届いたわけでもなし、昼の日中<sup>ひなか</sup>から4度の跪拝とは、何のまがまがしいまじないを覚えたのか！」舜は拱手の礼をして、母様に申し上げます。「お父様がしばらく遼陽へお出かけになり、家のことを私に任せました。お出かけの時は1年だとされたのに、3年たってもお戻りになりません。私は父様を心配して断腸の思い、歩琴を膝の上に置き奏でておりますと、家の前にあるご老人が来られて、昨日遼陽から戻られ、父様のお手紙をお持ちだといいます。2度の跪拝は母様にご挨拶を、後の2度はお喜びを申し上げたのです。」

(校注)

- [1] 叁、原卷は「叁」に作る。諸校本みな「三」に作る。
  - [2] 婦、原卷は「婦」。諸校本みな正字「歸」に作る。
  - [3] 逆、集録、潘校は「憶」に校訂する。校注校では、「原作『逆』亦通，但改『憶』較好。」按：「逆」有懸想、揣測之義，不煩改。」とする。「逆」「憶」は音通不可により、校注校に従う。
  - [4] 歩琴、諸説あるが不詳。周紹良の注に従う。「弦樂器名。大約以其長度得名。歩，長度名。其制歷代不一：周以八尺為歩，秦以六歩為歩；舊時營造以五尺為歩。」(周紹良『敦煌文學作品選』199頁 註11 中華書局 1987)
- 悉、集録が「席」に作るは不可(集校を参照する限り「席」は誤植)。潘校は、「悉」のままおく。項校は「席」に作る。校注校は「膝」に校訂する。
- [5] 何方而來、原卷「而」の字、「方來」の右傍に小字。集録は「方」字を欠く。

〔6〕 来、項校および校注校が「道」に校訂するのは不可。そのまま置く。

〔7〕 舜子、原卷は「舜子舜子府琴忠間」に作る。「舜子」は衍字。諸校本校記で触れず。

後阿嬢聞道苦嗽（髻叟）到来，心里當時設計。高聲喚言舜子：「實若是阿耶来，家里苦無供備。阿嬢見<sup>〔1〕</sup>後菌菓<sup>〔2〕</sup>子，非常最好，紅桃先（鮮）味。我<sup>〔3〕</sup>若嚙（摘）<sup>〔4〕</sup>得桃来，豈不是於家了事！」舜子問（聞）道摘桃，心裏當時歡喜。舜子上樹摘桃，阿嬢也到樹底。解<sup>〔5〕</sup>散自家頭計（髻），拔取金艾（釵）手裏。次（刺）破自家脚上，高聲喚言舜子：「我子是孝順之男，豈不下樹与<sup>〔6〕</sup>阿嬢看次（刺）？」舜子忽聞次（此）言<sup>〔7〕</sup>，將<sup>〔8〕</sup>爲（謂）是真無爲（偽）。舜子即忙下樹。

（翻訳）

繼母は髻叟が戻ると聞きますと、すぐさま心中計略を立てて、大声で舜を呼びますと、「本当に父様が戻られるなら、家になんの準備もしていない。裏庭の果物がとてもよく実って、紅桃が美味そうなのを見たが、（私たちが）桃を摘んで来たら、それこそ家事に長けているというものだ。」といいます。舜は桃を摘むと聞いて、すぐさま大喜び、木に登り桃を摘めば、母も樹の下へやってきます。と、髻を解いて金の簪を抜き手に取ると、自分の足を刺し、大声で舜を呼んで言います。「お前は孝行息子、樹から降りて母のために棘を見ておくれ。」舜はその言葉を聞くと、真とばかり思い、すぐさま樹から下りました。

（校注）

〔1〕 見、原卷「見」字、「嬢後」の右傍に小字で書き入れ。

〔2〕 菌菓、「菌」字校注校のみ「園」に作る。「菓」字、諸校本すべて「果」字に作る。

〔3〕 我、項校のみ、「我〔兒〕」と校訂。根拠に、後文の「我兒若修得倉全，豈不是兒於家了事」を挙げるが、この箇所は前後に「兒」が呼応して現れており、これによって「我〔兒〕」とはできない。

〔4〕 若嚙、原卷は「若常嚙」と作る。「常」字の右傍に「ト」（削除符号）あり。

〔5〕 解、諸校本皆「解」字に作る。

〔6〕 与、原卷すべて「与」に作る。諸校本すべて「與」に校訂する。

〔7〕 忽聞次（此）言、原卷先に「舜子次言」と書き、「次」字の右に「忽聞」の二字を補足する。「次」と「此」は音通。集校、潘校、項校は「舜子聞言」と作る。校注録は「忽聞次言」と作り、校記で「次」と「此」についての言及あり。

〔8〕 將、諸校本すべて「將」に作る。

【乙卷 P2721v】

房中卧<sup>[1]</sup>地不起。不經三兩□□□□□<sup>叟來</sup>至。瞽叟入到宅門，直<sup>[2]</sup>到自家房<sup>[里]</sup><sup>[3]</sup>。□後妻向床上卧地不起。瞽叟問言<sup>[4]</sup>：「娘子，前後見我不歸，得甚能歡能喜！今日見我歸家，床上卧<sup>[地]</sup><sup>[5]</sup>不起。爲復是隣<sup>[6]</sup>里相爭，爲復天行時氣？」後妻忽聞此言，滿目摧摧下淚。「自從夫去遼（遼）陽，遣妾勾當家事。前家男女不孝，見妾後園摘桃，樹下多里（埋）惡刺。刺我兩脚成瘡，疼痛直連心髓。當時便擬見官，我看夫妻之義。老夫若也不信，脚掌上見噴有膿<sup>[7]</sup>水。見妾頭黑面白，異<sup>[8]</sup>生豬狗之心。」

（翻譯）

（繼母は）部屋で寝込んで起きません。2、3日して…（瞽叟が戻りました。）瞽叟は家に入るとまっすぐ自分の部屋へやっ来てまいります。後妻は床に就いたまま起き上がりません。瞽叟が訊ねて「おまえ、以前は私が戻らないものだから嬉しくもないだろうが、今日はわしが戻ったのを見て（大喜びかと思いきや）、床に伏したまま起きもしないとは、近所でもめ事でもあったのか、流行病にでもかかったのか？」といいますと、後妻はその言葉を聞いて目に溜まった涙をはらはらと流し、「あなたが遼陽へいらっしゃってから、私に家を任されましたが、前妻の子は不幸者、私が裏庭で桃を摘むのをみて、樹の下にたくさん嫌な棘<sup>とげ</sup>を埋めました。その棘<sup>とげ</sup>に刺されて私の両足は傷ができ、痛くて痛くてその痛さは心髓までとどくほど。すぐさまお役所へ届けようと思いましたが、あなたとの夫婦の義理に免じてやめたのです。あなた、信じないのなら、足の裏に膿<sup>とげ</sup>がたまっているのが見えるでしょう？私がかきれいなのをみて、よからぬ心を起こしたのです。」

（校注）

- 〔1〕 卧、諸校本は「臥」に作る。
- 〔2〕 直、集校、潘校は「直」に作る。
- 〔3〕 房<sup>[里]</sup>、韻字を考えると「里」を補うのが自然。
- 〔4〕 問言：「娘子～、項校、校注校は「問言娘子：～」とし、「娘子」を地の文とする。
- 〔5〕 地、原卷にはない。項校、校注校に従う。
- 〔6〕 隣、諸校本は「鄰」に作る。
- 〔7〕 膿、集録は「濃」につくり、「膿」と校訂する。原卷が本来「膿」に作る。
- 〔8〕 異、原卷は俗体の字に作る。集録は誤って「冀」と録す。「異」は「意」と音通、「欲」の意味である。校注校が、『韓擒虎話本』の例を引くのに従う。

瞽叟喚言舜子：「阿耶暫到遼（遼）陽，遣子勾當家事。緣甚於家不孝？阿孃上樹摘桃，樹下多埋惡刺。刺他兩脚成瘡，這個是阿誰不是？」舜子心自知之，恐傷母情；舜子与<sup>[1]</sup>招伏罪過，又

恐帶累阿嬢：「己身是兒，千重万<sup>[2]</sup>過，一任阿耶鞭耻。」瞽叟忽聞此語<sup>[3]</sup>，聞嗔具<sup>(且)</sup><sup>[4]</sup>不可嗔，聞喜且不可喜。高聲喚言象兒：「与阿耶三條荆杖來，与打煞<sup>[5]</sup>前家歌（哥）子！」[象] 兒道<sup>[6]</sup>：「取荆杖。」走入阿嬢房裏。報云：「阿耶交兒取杖，打煞前家歌（哥）子！」後妻報言瞽叟：「男女罪過須打，更莫交分疎<sup>[7]</sup>道理！」像兒取得荆杖到來，數中揀一條麤物，約重<sup>[8]</sup>三兩便下<sup>[9]</sup>。是把舜子頭髮（髮），懸在中庭樹地。從項決到脚脛，鮮血遍流灑地。

(翻訳)

瞽叟は舜を呼び、「父さんはしばらく遼陽へ出かけ、お前に家の事は任せたのに、なぜ家で不孝を働くのか？母さんが木に登り桃を摘んでると、樹の下にたくさんあの嫌な棘<sup>とげ</sup>を埋め、お母さんの足は棘<sup>とげ</sup>に刺されて傷ができた、これは誰が悪いのか？」といいます。舜は心にそれと分かりますが、母の心情を傷つけることを恐れ、また、自分の罪を認め、母様に罪が及ぶのを心配します。「私めは息子であるのに、重い罪を犯しました。父様どうか存分に叩いてください。」瞽叟はこの言葉を聞くと、怒るまいでか喜ぶまいでか、大声で象児を呼び、「父さんに三本のお仕置きの鞭（荆杖）を持ってきておくれ、前妻が生んだお前の兄をこっぴどく叩いてくれよう。」弟の象児は「はい！」というと、母様の部屋へ入り、知らせます、「お父様が私に鞭を取ってこさせて、前妻の子である兄さんをこっぴどく鞭打つというのです。」後妻は瞽叟に、「子供が罪を犯したら、鞭打たねばなりません。言い訳申し開きなどさせてはなりません。」と。象児が荆杖をもってまいりますと、その中から一本太く重さ三両もあろうかというのを選び出しました。舜の髪を中庭の樹に懸け、首から足の先まで鞭打ちます。鮮血があまねく流れ地を覆います。

(校注)

- [1] 与、諸本言及なし。2行あとの「与打煞前家歌（哥）子」とともに積極的な意味及び機能は認められない。四六のリズムを考えると、ともに衍字と考えるべきであろう。
- [2] 万、諸校本みな「萬」に作る。
- [3] 此語、集校、潘校、項校すべて誤りて「此言」に作る。校注校は正しく「此語」に作る。
- [4] 具（且）、原卷誤って「具」に作る。
- [5] 煞、原卷は「殺」の俗体字であるが、諸校本すべて「殺」に書き換える。
- [6] 道、諸校本みな「[聞]道」と校訂するが、「象は荆杖を取ってきますと言うと」と解釈しうるので、補足しない。
- [7] 分疎、諸校本すべて「分疏」と作る。
- [8] 約重 原卷は「重約」に作る。右傍に「レ」あり。
- [9] 下、集録、項校は「不」。潘校、校注校は「下」。原卷は「下」に作る。ただし諸本句

読を「便下是」とする。当初衍字とみなしたが、句読を変えることで、六字句のリズムも保ち、「下」の解釈も可能になると判断し、句読を変更した。

瞽叟打舜子，感得百鳥自鳴，慈烏洒<sup>[1]</sup>血不止。舜子是孝順之男，上界帝釋知委。化一老人，便往下界來至。方便与舜，猶如不打相似。舜即歸來書堂裏，先念論語、孝經，後讀毛詩、禮記。

後阿孃亦（一）見舜子，五毒嗔心便起：「自從夫去遼（遼）陽，遣妾勾當家事。前家男女不孝，東院酒席常開（開）<sup>[2]</sup>，西院書堂常閉<sup>[3]</sup>。夜夜<sup>[4]</sup>伴涉惡人，不曾歸來宅裏。買（賣）却田地莊園，孝<sup>[5]</sup>得甚鬼禍術魅，大杖打又不死！忽若堯<sup>[6]</sup>王勅<sup>[7]</sup>知，兼我也遭帶累。解士（事）把我離書來，交 [我] 離你眼<sup>[8]</sup>去！」瞽叟報言娘子：「他緣人命致重，如何打他鞭耻？有計一<sup>[9]</sup>但知説來，一任与娘子鞭耻。」後妻報言瞽叟：「不鞭耻万事絶言，鞭耻者全不<sup>[10]</sup>成小事。」

（翻訳）

瞽叟が舜を打てば、それに感じて百鳥は鳴き、慈烏（カラス）はとめどなく血を吐きます。舜は孝子とて、上界の天帝は委細を知って、一老人に身をやつすと、下界へ降りたちます。方術を舜に施し、舜はまるで打たれなかったかのよう。そこで舜は書齋へ戻り、まずは『論語』『孝經』を読み、次に『毛詩』『礼記』を読みます。

継母はそんな舜を見ると、たちまちひどい怒りが沸き立ち、「あなたが遼陽にお出かけになり私に家事を任せましたが、前妻の子は不孝もの、東の棟で酒席がいつも開かれ、西の棟の書齋はずっと閉じられたまま、夜な夜な悪人と連れ立って、家へは戻ってまいりません。畑も下屋敷も売り払ってしまい、いったい何のまがまがしいまじないを覚えたものやら、ひどく鞭打っても死にやしない。もしも堯王がお知りになれば私までがとぼちりを食うことになります。物事をわきまえておいでなら、離縁状を持ってきて私をあなたの目の届かないところへやってください。」瞽叟が答えて、「人命は甚だ重いのだからやみくもに折檻できまい。考えがあるならとにかく言っておくれ、お前の思うままに折檻するに任せよう。」後妻が瞽叟に答えて言うには、「お仕置きをしないというなら、何も申しません。が、するとなると小さな事にとめておきませんよ。」

（校注）

- 〔1〕 洒、諸校本すべて原卷に同じく「洒」に作る。校注校のみ、「灑」に作る。変換ミスであろう。
- 〔2〕 開（開）、原卷は俗体字。諸校本は「開」。
- 〔3〕 閉、原卷は俗体字。諸校本は「閉」。
- 〔4〕 夜夜、原卷二字め踊り字。

- 〔5〕 孛、諸校本みな「學」に作る。  
 〔6〕 堯、諸校本みな「堯」に作る。  
 〔7〕 勅、諸校本みな「敕」に作る。  
 〔8〕 一、原巻に見えるが、諸校本いずれも、不出校。恐らくは衍字であろう。  
 〔9〕 眼、原巻「服」に作る。諸校本言及なく、みな「眼」に作る。  
 〔10〕 不、項校、校注校は後文のくり返しの状況と、7字句のリズムを根拠として「不」に意味を認めない。が、ここは寧ろ、「不」に積極的に意味を認めたい。

不經三兩<sup>[1]</sup>日中間、後妻設得計成。妻報瞽叟曰：「妾見後院空倉，三二年来破碎<sup>[2]</sup>。交伊舜子修（修）倉，四畔放火燒<sup>[3]</sup>死。」瞽叟報言娘子：「娘子雖是女人，說計大能精<sup>[4]</sup>細。」瞽叟喚言舜子：「阿耶見後院倉，三二年破碎。我兒若修（修）得倉全，豈不是兒於家了事！」舜子聞道修（修）倉，便知是後阿孃設計。調和一壺渥<sup>[5]</sup>水，舜子叉手啓阿孃：「渥水生治不鮮，須得兩個笠子。」後阿孃〔報〕<sup>[6]</sup>瞽叟<sup>[7]</sup>曰：「是你怨（冤）家修（修）倉，須得兩個笠子。大（待）伊怨（冤）家上倉，不計是兩個笠〔子〕<sup>[8]</sup>，四十個笠子也須燒死。」舜子纔上得<sup>[9]</sup>倉舍，西南<sup>[10]</sup>角便有火起。弟（第）一火<sup>[11]</sup>把是阿孃<sup>[12]</sup>，續得瞽叟弟（第）二。弟（第）三不是別人，是小弟象兒<sup>[13]</sup>。即三具火把鑼脚燒，且<sup>[14]</sup>見紅炎<sup>[15]</sup>連天，黑（黒）煙不見<sup>[16]</sup>天地。舜子恐大命不存，權把二个笠子爲塢<sup>[17]</sup>，騰空飛下倉舍。舜子是有道君王，感得地神擁起。遂不燒<sup>[18]</sup>，毫毛不損，歸來書堂院裏。先念『論語』『孝經』，後讀『毛詩』『禮記』。

（翻訳）

数日を経ずして後妻は目論みをたてます。瞽叟に告げて、「裏庭の空っぽの倉が、数年来壊れたままです。あの舜に倉の修理をさせて、四方から火を放って焼き殺してしましましょう。」瞽叟が答えて、「お前は女ながら、計略をたてるのは綿密で大したものだな。」そこで、瞽叟は舜を呼び、「父さんが見るに、裏庭の倉が2、3年来壊れたままだ。お前がすっかり修理してくれば、大いに家の役にたつというものだ。」舜は倉の修理と聞いて、すぐさま継母の計略と知ります。一山の泥と水を捏ね併わせると、舜は継母に拱手の礼をして申します。「泥と水がまだ馴染まず硬いままです。傘が二つ必要です。」継母は瞽叟に「あなたの可愛い子が倉を修理するのに二つ傘が要るそう。憎らしい子が倉に登ってしまえば、傘2つといわず、40個の傘があっても焼け死ぬでしょうよ。」舜が倉に上がるや西南の角から火が上がります。第1の松明はおっかさん、続けて瞽叟が第2、第3はほかでもない弟の象兒です。3つの松明から上がった炎は鑼の三本の足元から火が上がるかのように、紅炎が天まで上がり、黒煙で何も見えなくなっていました。舜は命の危険を感じ、まにあわせに二つの傘を羽にして、ひらりと倉から飛

び降りました。舜は徳行のある君王とて、それに感応した土地神が抱きかかえて起こします。焼かれることなく、髪の毛1本も損なうことはございませんでした。書齋に戻ってきますと、まずは『論語』『孝経』を読み、つぎに『毛詩』『禮記』を読みます。

(校注)

- 〔1〕 三兩、原卷は「三兩」に作る。諸校本すべて「兩三」に作る。
- 〔2〕 碎、諸校本「碎」に作る。
- 〔3〕 燒、諸校本「燒」に作る。
- 〔4〕 精、集録は誤って「稱」に作る。
- 〔5〕 一埶渥水 原卷俗体。諸校本「一堆泥水」に作る。
- 〔6〕 [報]、原卷字なし。原卷「後嬢阿」とあり、「嬢」字右下に「レ」(返り記号)あり。諸校本は恐らく「阿」字を「問」字に見誤ったため[ ]を付さず「問」字に作る。ここは、補足するなら「問」ではなく「報」が適切であろう。
- 〔7〕 瞽叟、校注校「叟」字を脱す。
- 〔8〕 笠 [子]、原卷「子」字なし。補う。
- 〔9〕 上得、集録、潘校、項校は誤って「得上」と校録する。
- 〔10〕 西南 原卷「雨西南」に作る。「雨」字の右傍に「ト」(削除符号)あり。
- 〔11〕 弟(第)一火把、集校「把火」に誤る。校注校「火」字脱す。
- 〔12〕 阿嬢、原卷「阿得嬢」に作り、「得」字を抹消した跡がある。
- 〔13〕 小弟象兎、原卷「小弟」下に「兒子」二字あり。ただし右に「……」(削除符号)あり。
- 〔14〕 燒、且、原卷は「且燒」に作る。右傍に「レ」(返り記号)あり。
- 〔15〕 紅炎、「炎」字諸校本「烟」に作る。
- 〔16〕 不見、原卷「且不見」に作る、「且」字の右傍に「ト」(削除符号)あり。
- 〔17〕 馮、校注校「馮」に作るが、待考。
- 〔18〕 不燒、項校、校注校は「不」を衍字または「意味がない」とするが、「燒」字の後に読点を入れると「不燒」で読める。

後阿嬢又見舜子，五毒惡心便起：「自從夫去潦（遼）陽，遣妾勾當家事。前家男女不孝，東院酒市（席）<sub>[1]</sub>常開（開），西院書堂常閉。夜夜伴涉惡人，不曾歸來宅裏。買（賣）却田地<sub>[2]</sub>莊園，孝<sub>[3]</sub>得甚崇禍術魅。大杖打又〔不〕死，三具火燒不煞<sub>[4]</sub>。忽若堯王勅知，兼我也遭帶累。解事把我離書來，交（教）我離你眼去！」瞽叟報言娘子：「緣人命致重，如何但修（修）理他。有計

但知説来，一任与娘子鞭耻。」後妻報言瞽叟：「不鞭耻万事絶言，鞭耻全 [不] <sup>[5]</sup>成小事。」

(翻訳)

継母はそんな舜を見ると、たちまちひどい怒りが沸き立ち、「あなたが遼陽にお出かけになり私に家事を任されましたが、前妻の子は不孝もの、東の棟で酒席がいつも開かれ、西の棟の書齋はずっと閉じられたまま、夜な夜な悪人と連れ立って、家へは戻ってまいりません。畑も下屋敷も売り払ってしまい、いったい何のまがまがしいまじないを覚えたものやら、ひどく鞭打っても死にやしない。3つの炎でも焼き殺せない。もしも堯王がお知りになれば、私までがとばっちりを食うこととなります。物事をわきまえておいでなら、離縁状を持ってきて私をあなたの目の届かないところへやってください。」瞽叟が答えて、「人命は甚だ重いだからやみくもにやつを料理できまい。考えがあるならとにかく言うておくれ、お前の思うままに折檻するに任せよう。」後妻が瞽叟に答えて言うには、「お仕置きをしないというなら、何も申しませんが、するとなると小さな事にとめておきませんよ。」

(校注)

- [1] 席、原卷は「市」につくり集録にならって諸校本「席」と校訂する。
- [2] 買(賣)却田地、原卷は「買地却」と作る。、「買地」の右傍に小字「田」がある。「地却」の右傍には「レ」がある。
- [3] 孝、上有「叢」字、「叢」右傍に「……」(削除記号)あり。
- [4] 大杖打又 [不] 死、三具火焼不煞 校注校は「死」「煞」を韻字の関係で交換すべきだと主張する。が、原卷のまま置く。
- [5] 全 [不]、諸校本ではこの箇所を根拠に前文の「不」を衍字とみなす。前文参照。

不經旬日中間，後妻設得計成：「妾 [見] <sup>[1]</sup>廳前枯井，三二年來無水。交伊舜子淘井，把取大石填壓死。」瞽叟報言娘子：「娘子雖是女人，設計大能精細。」高聲喚言舜子：「阿耶 <sup>[2]</sup>廳前枯井，三二年來 [無] 水。汝若淘井水出 <sup>[3]</sup>，不是兒於家了事？」舜聞濤(淘)井，心裏知之，便脫衣裳，井邊跪拜，入井濤渾。上界帝釋，密降銀錢伍佰(百) <sup>[4]</sup>文，入於井中。舜子便於渾罅中置銀錢，令後母挽出。數度訖，上報阿耶孃：「井中水滿錢盡，遣我出著 <sup>[5]</sup>，与飴一 <sup>[6]</sup>盤食者，不是阿孃能德？」後母聞言，於瞽叟詐云：「是你怨(冤)家有言：『不得使我銀錢，若用我銀錢者，出來報官』，渾家不殘性命！」瞽叟便即与(以)大石填塞。後母一女把著阿耶：「煞却前家歌(哥)子，交(教)与甚處出頭 <sup>[7]</sup>？」阿耶不聽，拽手埋井。帝釋變作一黃龍，引舜通穴往東家井出。舜叫聲上報，恰值一老母取水，應云：「井中是甚人乎？」舜子答云：「是西家不孝子。」老母便知是舜，牽挽出之，舜即泣淚而拜。老母便与衣裳串著身上，与食一盤喫了。報舜云：「汝莫歸家，但

取你親阿嬢墳墓去，必合見阿嬢現身。」說詞已了，舜即尋覓阿嬢墓。見阿嬢真身，悲啼血。阿嬢報言舜子：「兒莫歸家，兒大<sub>[8]</sub>未盡。但取西南角歷山躬耕，必當貴。」

(翻訳)

10日も経ないうちに後妻は計略を練り上げ、「母屋の広間の前の枯れ井戸は数年来水がない。舜に井戸を浚わせて、大石で埋め殺してしましましょう。」瞽叟は女房に、「お前は女ながら計略をたてるのが緻密で素晴らしい！」と言って、大声で舜を呼びますと、「お父さんの広間の前の枯れ井戸だが、数年来水もなし、お前が井戸を浚えて水が出たらば、家の役に立つというものだ。」舜は井戸浚えと聞いて、心中それと知りますが、服を脱ぐと井戸端で跪拝をし、井戸に入り泥を浚えます。天界の天帝は密かに銀錢500文を降ろし井戸の中へ置きます。舜は泥浚えの桶に銀錢を置くと継母に引き上げさせます。数度で終わると、上に向かい父母に申し上げます、「井戸の水は満ちて銭は尽きました。私を出してご飯を食べさせてくだされば、母様のご人徳といえましょう。」継母はそれを聞くと、瞽叟に偽って、「あなたの可愛い子がいうには、『私のお金は使わせない、もし使ったならば、出てお役人へ訴えてやる』ですって。一家全員命はないわ。」瞽叟はすぐさま大石で塞ぎます。継母の娘が父様をつかまえて、「お兄さんを殺してしまうわ。(お兄さんを)どこから出してあげるの？」父は聞かずに、娘の手をふりほどくと、井戸を埋めてしまいました。天帝は黄龍に姿を変え、舜を導いて穴を通じさせ、東の家の井戸へ出します。舜が上に向かって叫ぶと、ちょうど折よく老婆が水を汲みに来ておりました。舜に応じて「井戸の中はどなたじゃな？」舜が答えます。「西の家の不孝ものです。」老婆は舜と知ると引き上げて出してやりました。舜は泣きながら挨拶をいたします。老婆は服を着せてやり、食事を食べさせてやります。そして舜に、「家へは帰らず、実のお母さんのお墓へ行きなさい、お母さんの現身にきっと会えましょうぞ。」老婆の勧めを聞き終わると、舜はすぐに母様のお墓を訪ね行きます。母の現身に会い、悲しみのあまり血の涙を流します。母様が舜に言います。「息子や、家には帰ってはいけない。お前の大きな(災難/命)はまだ尽きていない。西南の方角、歷山で耕しなさい。必ずや立派になりますよ。」

(校注)

- [1] 妾[見]、集校の「用曾校補」に諸校本従う。
- [2] 耶、集録は「爺」に誤る。原卷によって正す。以下同じ。
- [3] 水出、集録は誤って「出水」につくる。原卷により正す。
- [4] 佰(百)、諸校本、不出校。
- [5] 出著、写本中「着」は1例も無し。すべて「著」の俗体。
- [6] 一、集録は脱す。今、原卷によって補う。

〔7〕 頭、集録は「坎」に作るが、原卷は本来「頭」の草書体。

〔8〕 諸校本みな「難」字を補う。が、「命」を補うこともでき、その場合はお前の未来はまだまだこれからなのだからとも読める。

舜取母語相別，行至山中，見百餘頃（頃）空田，心中哽噎。種子犁牛，無處取之。天知至孝，自有郡（群）豬与（以）觜<sup>〔1〕</sup>耕地開（開）壟，百鳥銜子拋田，天雨澆溉。其歲天下不熟，舜自獨豐<sup>〔2〕</sup>，得數百石穀來<sup>〔3〕</sup>。心欲思鄉，擬報父母之恩。行次臨河，舜見以郡（群）<sup>〔4〕</sup>鹿（鹿），歎云：「凡爲人身，遊鹿（鹿）不相似也！」泣淚呼（吁）嗟之次，又見商人數个，舜子問云：「冀都姚家人口，平善好否？」商人答云：「姚家千万，阿誰識你親情？有一家姚姓，言遣兇濤（淘）井，後母嫉之，共夫填却井築兇。從此後阿耶兩目不見，母即頑遇（愚），負薪詣市。更一小弟，亦復癡顛，極受貧乏，乞食無門。我等只識一家，更諸姚姓，不知誰也。」舜子當即知是父母、小弟也。心口思惟，口亦不言。

（翻訳）

舜は母の言葉に従い、山中へとまいりました。見れば、百頃あまりの何もない畑だけ、胸ふさがれます。種も耕牛も手に入れるところがございません。ところが天が舜の至孝を知ると、自然に群れなす豚が口で開墾し、百鳥種を銜え来て播き、恵みの雨が降り注ぎます。その年は天下は凶作なのに、舜だけは豊作で、数百石の収穫を得ました。故郷を思っ、父母の恩に報いたいと思います。道行くときに川のほとりで、群れなす鹿を見ては、嘆いて「人に生まれながら、群れ遊ぶ鹿のようにもなれないとは。」涙ながらに嘆いておりますと、商人数人に会いました。舜が尋ねて、「冀都の姚家の一家はみなご無事でしょうか？」商人が答えて、「姚家は千万とあるが、誰があんたの身内を知っていよう。姚を名乗るある一家は、息子に井戸浚えをさせて、継母がこれを憎み、夫ともども井戸を埋めて息子を殺してしまったそうな、その後、父親は目が見えなくなり、母は愚昧になり、薪を背負って市場で売り歩いている。小さな弟もいて、また気がふれてしまい、極貧のありさま、乞食をする手立てもないようだ。われらが知るはこの一家だけ、ほかの数多の姚家が誰かは知りません。」舜はすぐに父母、弟と分かりました。が、心で思うばかりで口には出しません。

（校注）

〔1〕 与（以）觜、集校には『與觜』即『以觜』，謂用觜耕地也。」とある。

〔2〕 郡、集録は「群」に校訂する。

〔3〕 来 校注は誤りて「米」につくる。

舜來歷山，俄經十載，便將米往本州。至市之次，見後母負薪，詣市易米，值舜糶（糶）<sup>[1]</sup>於市。舜識之，便糶（糶）与之。舜得母錢，佯忘安著<sup>[2]</sup>米囊中而去。如是非一，瞽叟恠之，語後妻曰：「非吾舜子乎？」妻曰：「百丈井底埋却，大石樁之，以土填却，豈有活理？」瞽叟曰：「脚試牽我至市。」妻牽叟詣市，還見糶（糶）米少年，叟謂曰：「君是何賢人，數見饒益？」舜曰：「見翁年老，故以相饒。」叟耳識其音聲<sup>[3]</sup>，曰：「此正似吾舜子聲乎！」舜曰：「是也。」便即前抱父頭，失聲大哭。舜子拭其父淚，与（以）舌舐之，兩目即明。母亦聰惠<sup>[4]</sup>，弟復能言。市人見之，無不悲歎。

（翻譯）

舜が歷山に来て、瞬く間に10年になりました。米を携えて故郷の所在地へ行きます。市場に着いたときに、継母が薪を背負い米に変えようと市場にやってきたのに出会います。ちょうど舜が米を売ろうとしているところでした。それと知った舜は米を売ってやり、代金を受け取ると、忘れたふりをして米袋の中へ置いたまま、行ってしまいます。そのようなことが一度ならずありました。瞽叟がいぶかしく思い、後妻に「うちの舜ではなかるうか」といいますが、妻は、「百丈の井戸の底に埋めて、大石を上から落として、土を隙間なくつめたのに、活きる手立てはなかったでしょうよ。」といいます。が、瞽叟、「わしを市まで試しに連れて行っておくれ」と。妻は叟を連れて市場へとやってきますとまた米を売る若者に会います。叟が「あなたはいずこの賢人でしょうか、たびたびお恵み下されて。」舜が、「ご老人がお年を召されておられるので、それでおまけしたのです。」叟はその声を聞き知っており、「これはまさしくわが舜の声の様だ！」といいますと、舜は「そうです」と、前に出て父の頭を抱いてわっと大泣きいたします。舜が父の涙をぬぐい舌で舐めると、両目が見えるようになりました。母もまた聡明になり、弟も口がきけるようになりました。市場の人々、これを見て悲嘆しない者はおりませんでした。

（校注）

- 〔1〕 糶（糶）、この箇所、原卷は「糶：糶（米を買い入れる）」に作り、下文「糶」は原卷「糶」に作る。いずれも「米を売る」の意でないといけないので最初の「糶」は「糶」に改める。
- 〔2〕 安著、集録は誤りて「安置」につくる。原卷により正す。
- 〔3〕 音聲、諸校本みな誤りて「聲音」に作る。
- 〔4〕 聰惠、諸校本みな「聰慧」に作る。

當時舜子將父母到本家庭。瞽叟泣曰：「吾之<sup>[1]</sup>孝〔子〕<sup>[2]</sup>！」不自斟量，便集隣里親眷，將

刀以煞後母。舜子叉手啓大人：「若煞却阿孃者，舜元無孝道。大人思之。」隣里悲哀，天下未門（聞）此事。父放母命已後<sup>[3]</sup>，一心一肚快活，天下傳名。堯帝聞之，妻以二女，大者娥皇，小者女英。堯遂卸位与舜帝。英生商均，不肖。舜由此卸位与夏禹王。其詩曰：

瞽叟填井自目盲，舜子從來歷山耕。 將米冀都逢父母，以舌舐眼再還明。

又詩曰：

孝順父母感于天，舜子濤（淘）井得銀錢。 父母拋石壓舜子，感得穿井東家連。

『舜子至孝變文』一卷

（翻譯）

すぐさま舜は父母を連れて元の家に帰ります。瞽叟は泣いて「わしの孝行息子よ！」といいますと、自分の事はさて置いて、近隣親族を集めて刀で継母を殺そうと致します。舜は拱手の礼をし、父上に申します。「母様を殺してしまったのでは、私には端から孝道がなかったことになります。お父上、このことをお考えください。」近隣の者たちは、天下未曾有の事と感嘆の涙にくれます。父が母の命を許してからのち、舜は身も心も晴れ晴れと、その名は天下に知れ渡りました。堯帝これを聞いて、舜に二人の娘を娶せました。上は娥皇、下は女英といます。堯王は遂に舜に讓位し、英は商均を生みましたが不肖の子でありましたので、夏の禹王に讓位したのです。其の詩には、

瞽叟填井自目盲，舜子從來歷山耕。

將米冀都逢父母，以舌舐眼再還明。

又詩に曰く：

孝順父母感于天，舜子濤（淘）井得銀錢。

父母拋石壓舜子，感得穿井東家連。

『舜子至孝變文』一卷

（校注）

〔1〕 吾之，原卷「之吾」に作る，右傍に「レ」あり。

〔2〕 子，原卷になし。補う。

〔3〕 已後，集録は「以後」と作る。原卷は「已後」と作る。

檢得『百歲詩』云：「舜年卅（二十），學問。卅（三十）<sup>[1]</sup>，堯舉之。五十，大行天下事。六十一，代堯踐帝位。在位卅（三十）九年，南巡狩，崩于蒼梧之野，年百歲。葬於〔江〕南九疑，是爲零陵。舜子姓姚，字重華。」又檢得『曆帝記』云：“舜号有虞氏，姓姚，目有重瞳。父名瞽叟，母号握登，顓頊之後，黄帝九代孫。都平陽，後都蒲坂。夏禹代立。」孔安國云：「舜在位五十年，

年一百十二歲。崩，葬蒼梧野<sup>[2]</sup>九疑山。帝舜元年戊寅。」

天福十五年<sup>[3]</sup>，歲當己酉朱明蕤賓之月<sup>[4]</sup>，冀生拾肆葉，寫畢記。<sup>[5]</sup>

(翻訳)

『百歲詩』を調べると次のようにある。「舜は年20にして学問をし、30にして堯帝これを挙げ、50にして大いに天下の事を行い、61にして堯帝に代わって帝位についた。在位39年間、南巡して視察を行い、蒼梧の野に崩す。年百歳。江南の九疑に葬られる。これが零陵たり。舜姓は姚、字は重華である。」また、『曆帝記』を調べると、「舜、号は有虞氏、姓は姚、目に重瞳あり。父の名は皞叟、母の号は握登、顓頊の後裔、黄帝九代の孫である。平陽に都をおき、後に蒲坂に都をおいた。夏の禹が代わり立つ。」とある。孔安國は「舜在位50年、112歳に崩す。蒼梧野九疑山に葬らる。帝舜元年戊寅」という。

天福十五年（950）、歲己酉に當たる。朱明蕤賓之月、冀は拾肆葉を生ず、寫し畢わり記す。

(校注)

〔1〕 「二十」及び下文「三十」集録は、皆合文「卅」、「卅」につくる。

〔2〕 野、集録は脱す。原卷で補う。

〔3〕 天福十五年、この年代に関して、金岡 1956では、「隱帝の乾祐三年に相當する（950年）」と考証している。また、「舜子變」の成立時期に関しては、Victor H. Mair氏は写本の書写時期は五代としながら、創作時期を舜の読書リストから唐代と推察している<sup>4)</sup>。

〔4〕 月、集録は誤って「日」に作る、原卷により正す。

〔5〕 この写本には以下の資料が付される。

#### 【付記】

盈人中末輩（輩），衆内微才；枉歷石磧，虚蹂洙泗；而又文虧翰墨，學寡牋毫；佻（紙）筆空圓，元無詞藻；幸因郎君不耻尠劣，奉邀命以寫周旋。盈愧惡，筆勢龔疎，望仁私俯垂不訝。

輒將草草，叨讀（贖）交（文）句；不憚荒蕪（蕪），略成四句：憚恒（伎）學寡又無才，既

4) "Although the extant copy of the "Transformation Text on the Extreme Filial Piety of Shun as a boy" was written down during the Five Dynasties period, its composition was probably T'ang. This may, in part, be deduced from the list of books therein that the boy Shun was said to have read, a list that is compatible with the curriculum of classical studies during the T'ang. The same conclusions may be drawn regarding the Tun-huang story about Ch'iu Hu." (T'ang Transformation Texts, HARVARD UNIVERSITY PRESS, Cambridge (Massachusetts) and London 1989 pp. 33-34

奉邀命不辭推。枉污白紙皆脫謬，展向人前不堪說。筆愧羲之書□□，文慙翰墨實心獲。  
儻若不訝相容納，結義傳札壁不□。

**【引用・参考文献】**

- 徐 1958 徐震堉「《敦煌變文集》校記補正」（《華東師大學報》1958年第1期）、「《敦煌變文集》校記再補」（《華東師大學報》1958年第2期）  
 蔣 1997等 蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』中華書局1959年（第1版）、1960年（第2版）、1962年（第三版）、上海古籍1981年（新1版）、1988年（新2版）、1997年（新3版、增補定本）  
 玄 2001 『敦煌文献の総合的・学際的研究』、平成12年度新潟大学プロジェクト推進経費（学際的研究プロジェクト）研究成果報告書（研究代表者 關尾史郎）

**【語彙索引】**

- 入矢義高 1961 「敦煌変文集」口語語彙索引 油印  
 松尾良樹 『敦煌変文集』口語語彙索引 再校原稿